

「市内出土の中世埋蔵文化財」を活用して社会科授業

—三崎小学校6年生社会科— これが清水の出土遺物だ！

7月に入り、三崎小・山脇教頭先生からの市史編さん室に急遽の電話あり。先日、埋蔵文化財センターの出前考古学を受講したが、土佐清水市から出土した埋蔵文化財がそこにはなかった。これを児童に見せてあげたい。市史編さん室の方で見学を兼ねた出前授業ができないかという相談であった。内心「待っていました！よっしゃ！」と叫び、快く引き受けることになった。

山脇教頭先生は多忙な中、早急に授業が実施できるように動き、岡村相良校長先生よりすぐに依頼文書が届いた。結果、7月8日(木)3～4校時に6年生の社会科(歴史的分野)において土佐清水市加久見地区で出土した中世埋蔵文化財を活用した授業を実施することができた。授業の担当は、生涯学習課市史編さん室の田村と吉本がチームティーチングにより実施し、児童からも意見や感想がたくさん出て盛況のうちに無事授業を終えることができた。

加久見地区では、2005～7年度に高知大学教育学部日本史研究室(市村高男教授)の科学研究、2007～9年度に土佐清水市教育委員会による国庫補助事業学術調査を実施、これにより埋蔵文化財の試掘確認調査が実施され、13世紀後半と15世紀の建物遺構とこれに付随する埋蔵文化財が検出・出土した。

授業では出土した13世紀後半から15世紀にかけての、多数のカワラケ片・常滑焼・備前焼甕と播鉢などの国内産の陶器片とともに、龍泉窯系青磁・高麗青磁・龍泉窯系青磁蓮弁文碗・青白磁梅瓶・白磁D類皿・天目茶碗・宋銭などの舶来性の中世埋蔵文化財を教室に持ち込み、これを実際に手で触りながらの授業を展開した。

これらの状況証拠から、中部や中国地方との交流、東アジア・東南アジアとの私的貿易が行われていた可能性が高いことなどを説明した。なお、この授業には、高知新聞清水支局長・山崎彩加記者が取材に見え、授業の様子を熱心に参観いただいた。この様子は後日、高知新聞朝刊記事に掲載される予定である。

◎授業の最後に児童一人ひとりが授業の感想を発表してくれた。その一部を紹介する。

- 遺構からどんな家だろうと想像できて面白かった。
- 出土品から当時の加久見の人の暮らしが分かってすごいと思った。
- 出土品を見て、離れた地域と交易があることが分かった。
- 出土品から清水に豪族が来た(定着した)わけが分かった(海の便がよかった)。
- 陶片を触ってみると質感(ザラザラ、ツヤツヤ)や脆さ丈夫さに違いがあるのが分かった。

- 自分も発掘してみたい。怒られない程度に家の庭を掘ってみたい。
- 山城が近くにあると知って見に行きたいと思った。

どの生徒からも、それぞれの視点で個性的な感想を聞くことができた。と同時に、授業の内容を飲み込んで、自分のものになっていることも伝わってくるものだった。このように**本物の文化財には、その時代に生きていた人々の「生活のにおい」や「息づかい」**が感じられるような気がする。これこそが**デジタルやバーチャル、イミテーションでは味わえない、本物が持つ醍醐味であり、価値であろう。**



生徒たちは皆、実際の出土品を前に興味津々の様子だった。陶片や磁器片を手に取り、質感を比べたり、時にはにおいを嗅いでみたりと、実物ならではの観察を行いながら用途を教わっていた。



青磁や白磁といった舶来性貿易磁器と備前焼や常滑焼などの陶器の手触りを通した質感の違い、素焼きのカワラケのザラザラした表面の様子など視覚や指の感覚を通して加久見地区で試掘された埋蔵文化財を児童たちは心ゆくまで堪能した。

授業の合間に「冬場に今度は中世山城を見に行きませんか？」と児童に投げかけるとみんな目を輝かせて「見に行きたい！」とのこと。三崎小学校校区には、三崎城跡・斧積城跡・奥猿野城跡・下猿野城跡など多くの山城がある。担任の山脇教頭先生も乗り気だ。岡村校長先生にお願いし、条件がそろえば是非実施させていただきたい。このように「地域は教材の宝庫」、地域を知り、地域から学ぶことは、自分の存在理由に帰着する大切なことである。